



茅ヶ崎市教育センター  
Chigasaki Educational Center

子どもたちのために  
ともに教育環境を考える  
教育センターの教育情報誌

# 学びあう響きあう

第6号  
平成25年12月2日発行

編集担当／茅ヶ崎市教育センター  
住所：茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号  
☎ 研究研修担当（市青少年会館3階）  
☎ 0467-86-9965  
☎ 青少年教育相談担当（同館2階）  
☎ 0467-86-9963  
URL <http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/13286/index.html>

幼児期の教育についての研究から見えた

## 「親の役割」と「親の迷い」

子育て中の親の役割と親の迷いについて、ご紹介します。

「ほめる・しかる」のは、親や大人の大切な役目です。でも、ほめ方やしかり方で、子どものやる気はどうやら違って来よう。こうした悩みは、親であるがゆえのこと。親になった役割を自身がどのように受け入れ、変化していくのが望ましいのか。こうした悩みと向き合うことは、人は生涯にわたって成長し続けるという点で、とても大切なようです。今回は、2つの講演内容のトピックをご紹介します。



### 【Contents】

- 「子どもの世界から見た『ほめる・しかる』—自信をはぐくむ言葉かけ」より抜粋  
明治学院大学助教 溝川藍 氏、乳幼児期の子育ち・子育て出前講座、平成25年11月16日（土）
- 「子どもが生まれて『親』になるということ—成長・変化・戸惑いの中で」より抜粋  
高千穂大学准教授 徳田治子 氏、乳幼児期の子育ち・子育て講座、平成25年10月24日（木）

### 子どもの世界から見た 「ほめる・しかる」—自信をはぐくむ言葉かけ

「平成25年度開催「乳幼児期の子育ち・子育て出前講座」より抜粋（講師 溝川藍氏、H25.11.16開催）



親であれば、誰もが「なるべくほめて育てたい」、そして「ときには厳しくしかることも必要だ」と思っていることでしょう。しかし、実際には親自身の心もちやコンディションによって、子どもにとって自分自身を振り返るために適切な「ほめる・しかる」がうまくいかないものです。特に、親にとっても、子どもにとっても、

「物事がうまくいかない！」ときに、どうやって自分の心を調整するかが大切です。

### 「マインドセット」ということ

さて、そのキーワードとなるのが、「マインドセット」です。（参考文献：キャロル・ドウエック、「やればできる!」の研究—能力を開花させるマインドセットの力、草思社、2008）これは、「ものの考え方」ということです。「マインドセット（ものの考え方）」には、「こちこちマインドセット」と「しなやかマインドセット」の2種類があります。「こちこちマインドセット」は、自分の能力や知能は決まっていって変わることがないという考え方です。そのために、1回のつまずきや、他者からの評価を気にしがちです。一方、「しなやかマインドセット」は、自分が変わっていけるという考え方で、粘り強くがんばり、苦労を覚悟でチャレンジすることができます。これは、実際には人の心の中に両方が存在しています。

物事が順調に進んでいるときはよいのですが、物事が順調に進まないときの取り組み方や立ち向かい方に、2つの「マインドセット」の違いが現れます。

さて、この「マインドセット」、赤ちゃんや幼児たちの心の様子はどうでしょう。そもそも、「こちこちマインドセット」の赤ちゃんはいません。でも、その後の成長の中で、大人の「マインドセット」が子どもに影響を与えることが分かっています。アメリカのある小学校の例では、「しなやかマインドセット」の教師の方が、子どもたちの成績は伸びることが分かりました。そして、親子関係でも、「こちこちマインドセット」の親では、子どもの能力認知や自尊心に影響が出ることが分かっています。（Pomerantz & Dong, 2006）

以上のことから、子どもをただほめたり、しかればよいわけではなく、「マインドセット」を育てるという視点を持って声をかけることが一つのカギになります。

## 子どもの世界から見た 「ほめる・しかる」



では、子どもをほめるとき、一体何をほめたらよいのでしょうか。ある幼児の研究では、興味深い結果が出ました。(Kamins & Dweck, 1999)

お絵かきやパズルといった課題で成功して先生がほめるという場面で、次のようなほめ方を変えた3つのグループで子どもの受け止め方を調べました。

### 【グループ①】

「いい子だね」とその子の人物を評価

### 【グループ②】

「ちゃんとできたね」と結果を評価

### 【グループ③】

「がんばったね」とプロセスを評価

すると、プロセスを評価するグループ③の子どもたちが、自分の作品を高く評価し、前向きで、もう一度やってみたいという挑戦の意欲も高いことが分かりました。

今度は逆に、お絵かきやパズルで小さな失敗をしたときに、教師が指摘、しかるという場面で、次のようなしかり方を変えた3つのグループで子どもの受け止め方を観察しました。

### 【グループ①】

「あなたにはがっかり」と人物を評価

### 【グループ②】

「ちゃんとできていない」と結果を評価

### 【グループ③】

「やり方が違う」とプロセスを評価

③のプロセスを評価するグル

ープの子どもたちが、自分の作品への評価が高く、前向きで、もう一度やってみたいという意欲も高いことが分かりました。

つまり、ほめるにしても、しかるにしても、「がんばったね」、「やり方が違っていたね」と取り組みのプロセスについて声をかけると、前向きな気持ちが高いことが分かったのです。

## 何をほめる？ 知能 vs. 努力

さて、もう一つ興味深い研究があります。(Mueller & Dweck, 1998) 子どもの知能をほめるのか、努力をほめるのかによって、新しい課題へ向かう意欲が変わってくるというものです。小学校5年生を対象とした海外での研究です。

まず、全員が簡単なパズル課題に取り組みます。そして、ほめ方を次のように2つのグループで変えます。

### 【グループ①】

「頭がいいね」と知能をほめる

### 【グループ②】

「よくがんばったね」と努力をほめる

次にパズル課題で、簡単な課題、難しい課題を選んで取り組んでもらいます。さて、2つのグループはどの課題を選ぶでしょうか。

すると、「頭がいいね」と知能をほめたグループ①の子どもたちは、「簡単な課題」を選び、「よくがんばったね」と努力をほめたグループ②の子どもたちは、「難しい課題」を選ぶ割合が高かったのです。この結果を見てみますと、

「頭がいいね」と知能をほめられたグループ①の子どもたちは、「次も失敗はできない。賢く見せなきゃ」と、自分にとっては簡単な課題を選んだようです。一方、「がんばったね」と努力をほめられたグループ②の子どもたちは、「次はできそう！ やっているところをもっと見てもらおう」と意欲的になっていたことが推測できます。

さらに、どちらのグループの子

どもたちにも難しいパズル課題に取り組んでもらいます。この課題は、難しいのでできる子はいないのですが、その結果のとらえ方が興味深いのです。

「頭がいいね」と知能をほめたグループ①の子どもたちは「できないのは自分のせい」と結果を消極的に受け止めました。一方、「よくがんばったね」と努力をほめられたグループ②の子どもたちは「がんばりが足りない」と積極的に結果を受け止めました。

こうした研究から言えることは、色々なことに取り組んで、成功や失敗の後に、例えば「いい子だね」「あなたにはがっかり」「頭がいいね」など人物・知能について評価されると、消極的な感情をもち、意欲が持続しないということです。

## 大切な言葉かけとマインドセット

改めて大切な言葉かけと「マインドセット」について考えてみると、人物・知能を評価したり、親の言うことに従わせたりするための「ほめる・しかる」では、子どもの意欲にはつながらないでしょう。それより、取り組んでいる努力の過程に目を向け、成長・発達の可能性を伝えていくことが大切だと考えます。そして、子ども自身が、「ぼく・わたしは、自分の行動次第で変われるんだ」という実感をもつことによって、「難しくてもがんばろう！」という意欲につながるのだということです。



\*\*\*\*\*

ここまで、具体的な「ほめる・しかる」という親や大人の子どもの関わり方について、溝川先生のご講演を紹介しました。親はいろいろな場面で、子どもへの接し

方に戸惑うものです。溝川先生のご講演の中で大切なことは、ただほめれば子どもは伸びるということではなく、子どもの世界に寄り添って見て、子どもなりの感じ方に目を向けることだと思えます。どんな子に育ててほしいか、どんな子に育てたいのか、と日々考えていることは、実は、どんな親でありたいか、どんな大人として成長していくのかを問い直していることでもあると思えます。

次は、「親の育ち」について、徳田治子先生のご講演のトピックを紹介します。

\*\*\*\*\*

## 子どもが生まれて「親」になるということ ー成長・変化・戸惑いの中でー

「平成 25 年度開催「第 6 回乳幼児期の子育て・子育て講座」より（講師 徳田治子氏、H25. 10. 24 開催）より



従来の発達心理学では、子どもの発達という観点から、親のよい関わり方や発達環境としての親のあり方について研究が進められてきました。今日では、生涯発達という視点から、親自身の生涯にわたる成長について研究が進められています。ここでは、親の発達という問題を、親子の関係性の中で共に発達していくものという点から考えていきます。

### 生涯にわたる親子関係の展開

親子関係が生涯にわたってどのようにして展開していくかということについては、海外を中心にさまざまな研究成果がまとめられています。多くの研究は、生

涯にわたる親子の関係をいくつかの段階に分けて、その特徴を明らかにしています。

これらの研究が共通して明らかにしていることは、まず第 1 に、親子関係は妊娠期から始まり、子どもが独立して、親自身が老いていくまでずっと続く関係であるということです。また、親子という関係は、自分と子どもだけでなく、自分と親というように、子育てが終わったとしても世代の重なりをもってサイクルとして回っていくと考えられています。

第 2 には、親子の関係性は、それぞれの発達段階に異なった特徴があり、親としてのあり方や求められるものも各段階で異なってくるということです。特に前半は、言葉を話すようになる、自己主張をするようになるといった子ども側の発達に先導されるようなかたちで親子関係のあり方が展開していきます。

このため、親子関係そのものは連続していますが、その段階ごとに親子関係がうまくいったりいかないといった問題が出てきます。乳幼児期にうまくいったからと言って、反抗期にうまくいくとは限りませんし、その逆もあります。また、親にも、赤ちゃんの時が得意であると感じる人もいれば、もっと大きくなった方がつき合いやすいと感じる人もいます。

第 3 には、親子関係にはそれぞれの発達段階に応じて異なった特徴がある一方で、その発達や変化にはある共通したパターンが見られるということです。親子関係がある段階から段階へ移行する際、すなわち子どもの発達や成長の節目には、親子の間には心理的葛藤や危機が生じやすいこと、そして、そのような心理的葛藤や危機が親子関係の深まりや親自身の人間的成長において極めて重要な役割を果たしていることが明らかになっています。

子どもの成長とは、親にとって喜ばしいものであると同時に、自

分がそれまで培ってきた経験ややり方とは異なった対応のあり方や姿勢を求めるものでもあります。例えば、子どもがごく小さいときには、子どもの求めることに耳を傾け、それをかなえるべく対応していきませんが、子どもが成長し、親から離れていくときには、子ども自身の自我と向き合い、時には衝突しながら、社会で生きていくことを教えていく必要があります。その際、理想とする子どもや自分のあり方の見直しを迫られたり、親自身の生き方や価値観も問われていくこととなります。

このように、子どもが生まれて、成長していく中で、親は、今まで自分が当然と思っていたことがうまくできなくなったり、自分の理想とする親の像と違っていたりすることに気づいていきます。子どもが生まれ、親になることによって、自分を見つめ直すという経験が増えるのはこのためです。そして、自分と子どもの現実の姿にどう向き合い、対応していくのか、そこで起きてくる葛藤をどう乗り越えていくかということが、親子関係の深まりや親としての発達や人格的成長をもたらすのです。



### 時間を味方につける

私自身は、親の発達という視点から子育ての問題を考えると、「時間を味方につける」ということが鍵になると考えています。

第 1 に、子育てとは、子どもの成長によって特徴づけられるものです。したがって、子どもの成長や発達について知識や理解をもつことで、その変化や対応にあ

る程度見通しをもつことが大きな助けになります。

第2に、子育てにおいては、親自身が人生の展望をもっておくことが重要です。子どもを育てる際、親には、「この子と育つ自分はどうなっていくのだろう」「個人としての自分はどうなっていくのだろう」という自分自身への問いかけや揺らぎが起こってきます。こうした状況においては、「今は、こういう時期だから、子どもを中心に過ごそう」、「今後、おそらくこうなっていくだろうから、自分はこういうふうにしよう」というように、ある程度の見通しをもちながら、自分の人生の展望を描くことで、目の前にある現実や今、この場で大切であることを見極め、それに関わっていくことができます。

第3に、子育てには、よいとか悪いとかはっきり割り切れないものがたくさんあります。割り切れないもの、その場ですぐに解決できないものは、時間を味方にすることで解決策が見つかったり、問題の見え方が変わったりするという側面があります。子育てや親であるということは、私たちが考えている以上に複雑な経験です。すぐには解決できないことや不確かなまま前に進んでいかなければならない状況のなかで、「時間を味方につける」という心構えをもつことは、問題を深刻に受け止めすぎず、その解決を待てる心の余裕を与えてくれます。

### 子育ての複雑さ

この子育ての複雑さという問題について、以前に演者が行った調査についてお話したいと思います。この調査では、乳幼児を育てる母親に次のような質問をしました。

- ①「子育てによって得たもの、失ったものについて教えてください」
- ②「子育てによって得たもの、失ったものについて、それぞれのようにお考えになっていますか」

①の「得たもの」については、大きく次のような答えでした。

- ポジティブ（前向き）な情緒的経験（子どもへの愛情、優しさ、喜び等）。
  - 新たな関係の広がり（夫婦、実家、子どもを介した友人）。
  - 育児による人格的成長（新たな自己の発見、経験の広がり、我慢や忍耐力）。
  - 母親としての新たな自分。
- 一方で、①の失ったものについては、次のような答えでした。
- 自分の時間。（8割強の方）
  - 出産・育児前の自分とつながる「もう一人の自分」。
  - 出産・育児前の人間関係。
- これに対して、興味深いのが②の質問に対する答えでした。

失ったものに対して、「失ってしまった。どうしてくれるんだ」という考えをもっている人は、全体の1～2割で、ほとんどの方は、「失ったけれども失ってない」と答えました。その理由をさらに尋ねると、「時間が経てば戻ってくるし、その分得たものがある」、「自分で覚悟したのだからマイナスだと思わない」、「自分も親にしてもらったんだから、それを返すとき」、「失うことは大した問題ではない、むしろ喜びでもある」などとそれぞれの方が自分の人生のあるべき時期として位置づけていることが分かりました。

子育てという問題について考える際、私たちは、つい失ったものに目を向けがちですが、両方を並べてみる、あるいは長い時間軸で捉えると、その捉え方は異なってきます。また、日常なんとなく感じている気持ちを丁寧に探っていくと、むしろ、今の自分にとって必要であったり、自分の成熟の証として捉え直すことができるかもしれません。

日々成長していく子どもに関わる中で、その都度、立ち止まって考えることは難しいことかもしれませんが、親子関係や自分の人生や生き方を考える上では是非大切にしていきたい視点

です。特に、子育てに不安を抱いている場合には、「時間」というのはさらに不安になる要素かもしれませんが、「時間を味方につける」ことで見え方が違ってくるのではないのでしょうか。

※徳田先生は、さらに乳児期、幼児期と子どもが成長するにつれ、親がどのように成長し、変化していくかということについてご講演されました。今回は、紙面の都合上ここまでとさせていただきます。

\*\*\*\*\*

「時間を味方につける」ことは、育児に限らず、人間が創造的に生きていく上で、とても大切な視点であると改めて思います。

これは、育児というのは取りも直さず、子どもが生まれながらにして持っている成長しようとする力や姿をしっかりと見つめながら、親自身がどんな人生を思い描いていくかという未来への物語づくりであると思うからです。

時に育児をする中では、子どもが未熟であるがゆえに、しっかりとしつけをしなければいけないと感じることが多々あります。あるいは我が子が言うことを聞かなかったり、ぐずったりなど短所に見える場面が多くあるかと思います。こうした我が子のマイナス面に目を向けるとき、親自身が育てられてきた環境、時には嫌な思い出がよみがえってくるようなことがあります。私たちは過去を変えることはできませんが、未来をつくることには可能性があります。そのためには、長い時間の中で、「今」をどう見つめるかという感覚が大切なのでしょう。



【研究研修担当】